



紙よ、ありがとう

山本寛斎

携帯電話やメールといった通信・交流ツールが出れば出るほど、私は「紙の表現」で人と交流をしたいと決意を新たにしています。

私は今、人生最大のプロジェクトであるスーパーショー「アポルタージユ」接舷攻撃 サムライ・土方歳三」に向けて突き進んでいます。本番が7カ月後に迫っているので、企業トップのみならず「協力」をあおぐためせせと手紙を書いているYUKIya。

いわゆる経済人が「右肩上がりの時代は……」という議題で日本という国の先行きについて論じたりしていますが、どういつ答を出すにせよ、「こういつ時こそ、諸問題に向かつて一人一人が元気に挑もうではありませんか」というのが「アポルタージユ」の大テーマです。未来の日本はどうあるべきかと考えていた坂本

竜馬や、自分の信じたところをとことん進んだ土方歳三、この高い志をもつサムライたちから学ぶことはじつに多い。このイベントを通じて私なりに日本の元気を提案し、表現したい。その時に欠かれないのが紙です。

たとえば、舞台全面に張られた水の上に、未来の象徴である黒船。その帆を揚げる150名の男女。日本国中から参加してくれる100の太鼓を打ち鳴らす少年少女。そして最後に、何千キロの生花と紙片が天井から……。

紙を大量に使ったのは、95年にベトナムで行った「カンサイ スーパーショー 口ロ!!ベトナム」がすこかった。これは、世界でも稀な、湖の上を舞台にして、「人間讃歌」を謳ったものでしたが、かつての映画『南の島に雪が降る』のように、ベトナムの人に雪を見せたいと思ったことがきっかけでした。しかし、その湖は魚の養殖に使われている。そこに大量の紙片を大空から降らせたいと決意。少なくとも、その紙を魚が食べて、やがてその魚を人々が食べることはわかっていたから公害にはならないと、静岡の製紙工場へ何度も足を運んで研究を重ねたことを思い出す。こつとした苦労の甲斐があつて、一切問題がないという紙が完成しました。しかもこの紙はベトナム



山本寛斎(やまもと かんさい)
デザイナー/プロデューサー。
1944年、神奈川県出身。71年、
ロンドンにおいて日本人初のファッション・ショーを開催。以後、世界の第一線で活躍。また、スーパーショーを通して、人間の強さ、素晴らしさを表現し続けている。

ナム名物・春巻きの皮 つまりお米からできている。「これこそ、まさに素晴らしい魚の餌。だから、元気に降らせてやろつ」と盛りあがりました。
『アポルタージユ』は、来年7月10日、11日の2日間で計4~5万人の方々に見ただけだと思っています。まさにオリンピックの開会式を凌駕する規模をイメージ。簡単にいうと、「巨大なお祭りを一緒にしよう。参加者、この指とまれ」という呼びかけです。ただ、海外での他流試合を経験してきた私が創り出す世界とみなさんが想像するものとは、規模においてギャップがあるらしい。本番時に「まさかここまでやるとは!?!」という、人間のエネルギーを訴えたい。
改めて考えてみると、私はすべての表現が紙にながります。桁外れのアイデアは私の頭と心の中に宿るが、それを最初に表すものが紙、画用紙です。大袈裟ではなく、私の全人生、全活動で終始必要なものが紙であり、なくてはならないものが紙なのです。そして、私はアシスタントに今日もこつこつ「画用紙が足りんぞー!」。

PAPER COLUMN Vol.9

ほどほどの白さ

同じ種類の紙でも、白さに違いがあるのをご存知ですか? 私たちが毎日、目している新聞用紙が50~55%、ハガキが70%、コピー用紙が70~80%。これは、紙の白さを表す数値で、「白色度」といいます。以前は、白色度が高いほど良いと思われていましたが、最近では「ほどよい白さの再生紙を使おう」という考えの人が多くなってきています。

古紙から紙をつくる時、まずはインキを取り除きます。さらに白色度を上げるために、

漂白をする場合もあります。薬品もエネルギーもより多く必要になり、コストも増えます。「ほどほどの白さ」への理解が深まるほど、再生紙の利用は進むことになります。



今回は2月5日号、北原照久さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpagr.jp>

photo: Yohei Maruyama